

## 特集：広がる読書支援

# 英国の初等学校における物語の読みの教育

藤森 裕治

## はじめに

日本と英国の書籍販売額は、日本が圧倒的に優勢である。2010年の英国の総売上額が約31億ポンド（1ポンド140円として約4,340億円）であるのに対し（文科省、平成23年度「生涯学習施策に関する調査研究」読書環境・読書活動に関する諸外国の実態調査報告書）、我が国は2017年で1兆3,701億円に達する（全国出版協会調べ）。

この数値をみると、日本のほうが読書大国に思われる。だが、販売額の推移をみると印象は逆転する。というのも、英国のそれが毎年増加しているのに対し、日本は2兆6,000億円を超えた1996年を境に、減少の一途を辿っているのである。

実際、英国では片田舎の町でも書店は必ず見かけるし、電車の中で大人が開いているのは駅頭で配られた新聞やペーパーバックである。

この違いの背景として、両国の読書文化のあり方が関与することは間違いない。英国では国民読書年が1998・2008年に制定され、企業やプロ・サッカークラブが無償で学校に本を提供するなど、読書が国を挙げて奨励されている。町の図書館はショッピングモールに併設され、買い物ついでに本を借りて読む習慣をもつ人も少なくない。

## 読書指導と「国語」の授業

読書文化の振興にとって、学校はその一大拠点である。例えば日本でも、朝読書や読書感想文コンクールなどをはじめとして、子供たちに読書習慣を身につけさせる活動は広く行われており、近年では義務教育段階の子供たちの読書量が増加傾向にあるという、喜ばしい結果も出ている。

一方、小学校でのべ1,461時間行われる「国語」の授業の中で、読書文化の振興を目指す活動が盛んに行われているかということ、あまりその印象がない。多くの「国語」の授業では、教科書の文章をもとに、学習の手引きに沿った一斉学習が展開しているように思われる。

特に、子供たちの読書活動の中心をなす物語の読みについては、初発の感想とあらずじ把握、そして主人公の気持ちを考える活動に終始する傾向があり、自立した読者の育成を目指して物語の読みの指導を行う授業は、あまりみかけない。

それでは英国の初等学校では、この種の授業をどのように進めているのだろうか。読書文化の振興や読書人の育成に資する工夫や方法が、物語の読みの授業で観察されるだろうか。

この問いに答えるため、本稿では、筆者がこれまでに訪問した英国の初等学校群11校のうち、読書教育における優れた取り組みが全国的に注目されているロックザム初等学校（The Wroxham School）を舞台に、英国における物語の読みの指導がもつ文化的特徴を検討する。

## ロックザム初等学校とは

ロックザム初等学校（以下、ロックザム校）は、ハートフォード県（Hertfordshire）にある児童数242名の公営初等学校である。通学児童は4～11歳児で、幼稚園を併設している。2001年段階では教育水準局から学校評価の最低段階を示す「特別検証」校と判定されていたが、2003年にアリソン・ピーコック（Alison Peacock）氏が校長に着任してから抜本的な改革に取り組み、2006年の査察までの3年で「優秀」に転じた。以後、すべて